

# 土と兵隊

## 映画文学人生論

原作：火野葦平 (1938) 「文藝春秋」  
監督：田坂具隆 (1939) 脚本：笠原良三 陶山鉄  
出演：玉井伍長 小杉勇 撮影：伊佐山四郎 横田達之  
坂上上等兵 井染四郎 音楽：中川栄三  
参考：『麦と兵隊』 (1938) 「改造」  
『花と兵隊』 (1939) 「改造」

夕陽といふと、兵隊はすぐ赤い夕陽の戦場を思い出す

火野葦平の『土と兵隊』『麦と兵隊』『花と兵隊』の三部作を読む、

昭和十二年七月に日中戦争が勃発、火野葦平は九月に第十八師団柳川兵団に招集された。翌十三年三月には『糞尿譚』で芥川賞を受賞し、報道班勤務を命じられて、徐州会戦に従軍した。

時間的には、杭州湾の北沙への敵前上陸の状況を主として弟への手紙で報告した『土』が先で、徐州会戦の戦況を日記体で書いた『麦』が後だ。『花』は杭州に駐留して、中国人と交流した模様を小説形式で描いている。

作者の分身である玉井伍長は、分隊長として十三人の部下をひきいることになった。「私は今十三人の部下を得、これを命令によって自由に水火の中に突進せしめ、死の中に投じ得る、と云われたのである。そう聞かされた瞬間、私はあまりの事の重大さに愕然とする」と、彼は十月二十日付で弟への手紙に書いた。

「島の右手に少し高い山があつて、その真上に沈みかかった太陽がある。夕陽というと、兵隊はすぐ赤い夕陽の戦場を思い出す」とも。

この文章から判断すると、責任感が強く、人情味があり、感傷にふけりやすい男のようだ。さらに十一月二日付では次のように書いている。

「どうだ、兄さんは通俗小説の作者のように頭



# 土と兵隊

映画文学人生論

がよい。お誂えむきにそうなって来た。舳の甲板の付近から誰かが、「此処は御国を何百里」と歌い出した。すると船の上に出てゐる兵隊は皆これに和し始め、次第に声が高くなった。作者が合唱に加担することは面白くないけれども、私も無論これに和した。さて、それでは、胸せまり、熱い涙が滂沱として頬を下るのでなければ、小説にならぬ。そこで、兄さんはさめざめ泣いた」。

こここのところを読んで、『土と兵隊』は通俗小説なのだろうか、と考えさせられた。

「此処は御国を何百里。離れて遠き満州の 赤い夕陽に照らされて 友は野末の花の下」——は「戦友」という感傷的なメロディの軍歌である。私は兵隊に召集された経験はないが、若い頃、友と酒を飲んで、この歌を合唱したことはある。

しかし、『花と兵隊』には中国娘の玉金と眇月が「抗日牡丹の歌」をうたう場面もある。大きな深紅の花弁を持った牡丹の花園に、凄まじい嵐が起つた。石の如き雨粒と、箒の如き風とが、この花園を襲ったけれども、牡丹の花弁は千切られても、吹き折られる後から後からと無限に吹き出た。つまり日本の武力が如何に強くとも、支那は永遠に滅びることはないという歌だ。

泥によごれし背囊に

さす一輪の菊の香や

異国の道を行く兵の

眼にしむ空の青の色

火野葦平